

『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』

谷富夫編、世界思想社、2008年、308頁、2,300円

叶堂 隆三（下関市立大学）

1980年代前半、二冊の本に出会った。一冊は、北杜夫『輝ける碧き星の下に』（新潮社）、もう一冊は、前山隆『非相続者の精神史—或る日系ブラジル人の遍歴』（御茶の水書房）だった。ともにブラジル移民の世界を扱っていたが、小説・論文と領域に相違があった。にもかかわらず、双子のような類似性を感じさせた。それは、後者がブラジル移民の日常生活や一人の人物が生きた世界をリアルに描いていたため、文学への近接性を強く感じたものである。

前山が用いた手法、ライフヒストリーに大いに興味を抱いたものの、とはいえ自分自身の研究・研究分野にどのように組み込めばいいのかは、当時、雲をつかむような話だった。谷富夫編『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』は、ライフヒストリーを組み入れた研究の実際から構成されたテキストである。ライフヒストリーを学んだが資料としてどのように活用すればいいか、ライフヒストリーの資料として価値をどの程度研究に反映させることができるのか、と悩める者への道標といえる好著である。

本書は、1996年に出版された旧版を加筆修正したものに、新たに二章を追加した新版である。編者の谷によれば、何よりも、ライフヒストリーは、異文化理解に「刀の冴えを発揮する」という。さらに社会的存在としての個人の歴史を記述する時に、その資料的価値が付与されるという。本書は、第一線の研究者のフィールドワークを通して、ライフヒストリーのもつ資料的価値を顕示することで、それを学ぶ人への手ほどきをめざしているといえる。まず、四部構成のⅠ部「ライフヒストリーで社会を読み解く」で、1「ライフヒストリーとは何か」2「ライフヒストリーの可能性」で、ライフヒストリーという専門用語を構成する二語、すなわち、「ライフ」と「ヒストリー」から、そのままざし（生活の主体や領域）と調査者と対象者との間の共同性（構築主義）という方法的特徴を明らかにする。後者に関して、「ヒストリー」が必ずしも厳密な時間概念でなく、「時間の奥行き」「語り」という広範な中味をもつことに言及している。また、ライフヒストリー

の可能性として、より信憑性の高い仮説を索出できる点を指摘している。いずれも編者の谷の担当である。

I部につづくII部～IV部が、各執筆者のオリジナルデータに基づくライフヒストリーを組み込んだ研究の実際である。これらの研究は、おおまかに3つの領域、すなわち、エスニシティ、都市的世界、性・医療等に区分できよう。すなわち、編者の谷がまさに「刀の冴えを発揮する」と述べている領域である。

エスニシティの領域では、「沖縄出稼ぎ者と定住」「在日韓国・朝鮮人の『世代間生活史』」「在日コリアンの子供たち」という研究が、また都市的世界の領域では、「都市下層と生活史法」「文化住宅街の青春」「企業家と地方都市」という研究が、性・医療等の領域では、「ライフヒストリー研究におけるジェンダー」「高度医療に見られる生と死」という研究が提示されている。

例えば、「在日韓国・朝鮮人の『世代間生活史』」「文化住宅街の青春」は、われわれの「訳知り」的なステレオタイプの認識を揺るがしてくれる点で、まさに異文化理解を深めてくれる研究である。前者は、高学歴・専門職を排出している在日韓国人・朝鮮人の一族に対して、個人的優秀性によって階層による規定性が超越されたとする例外視でなく、社会的マイノリティが置かれた社会階層的な状況に対応する社会的戦略という、一つの理想型として把握しようとしている点で興味深い。すなわち、ライフヒストリーが典型的事例を扱うことで、社会的説明として有効性を発揮している研究といえよう。後者もまた、P・E・ウィルスが「ハマータウンの野郎ども」で明らかにしたイギリスの労働者階級の子供たちの世界が、大阪府のW市の文化住宅においても確認され、教育に対する一般的理解・評価が万能の物差しでないことを知らせてくれる研究である。

他に、「都市下層と生活史法」「ライフヒストリー研究におけるジェンダー」を通して、聞き取り調査における調査者と対象者の間に生じる関係性の困難さや限界が示されていて、ライフヒストリー調査を試みようとするものにとって有用な忠告になっている。また、巻末には、国内および欧米の文献紹介が掲載されていて、読者の関心の展開に対応している。

若干の希望を述べるなら、ライフヒストリーをこれから自分の研究や論文に取り込もうとする者、とりわけ卒業論文等でチャレンジしようとする初学の者にとって、ライフヒストリーの用いた研究のアウトプットの提示にとどまらず、ライ

フヒストリーを組み入れて論文を作成していく際の資料的配置のプロセスや作成上の実践的なアドバイスが、視覚的にレイアウトされるような何らかの工夫があれば、さらに利用しやすいものになると思えた。

『地方からの社会学—農と古里の再生をもとめて』

堤マサエ・徳野貞雄・山本努編著、2008年、学文社、243頁、2,500円

奥田 憲昭（大分大学）

地方の農山村は過疎化や少子高齢化が進み、その存続そのものが危機的状況に直面している。本書はこうした状況にある農山村の家族、地域社会、農業などの現状を実証的に分析し、その存続可能性と必要性を示すことを目的として編集されたものである。大都市と地方の格差が社会問題となり、農山村に限らず地方中小都市も含めた地方において極端な少子高齢化と急激な人口減少が進行しつつある今日、本書はきわめて意義深い時宜を得た企画である。

本書の構成は、第一部家族・女性（1章・2章）、第二部少子高齢化（3章・4章）、第三部地域社会（5章・6章）、第四部農業・環境（7章・8章）といった4部構成となっており、今日の過疎農山村社会の基本問題が網羅されている。

1章（堤マサエ）の「人びとの生活拠点としての家族と暮らし」においては、小家族化、核家族化、単独世帯化の動向を全国・県・町と比較して地方の特色を明らかにするとともに農村の暮らしの変化をさまざまな視点から記述している。2章（大友由紀子）の「地域社会における女性の暮らしと労働の変化」は、世代別に女性と農業とのかかわりを明らかにし、山梨県勝沼町の調査を中心に暮らしのなかでの女性の役割や農業経営への参画状況を明らかにしている。

3章（堤マサエ）の「少子化の社会的背景と人が育つこと」は、地方の少子化の現実に触れるとともに少子化時代の子育て論、地域づくり論を展開している。

4章（高野和良）「地域の高齢化と福祉」は、農村高齢化の実態と特徴を指摘し、大分県日田市中津江村の集落の事例研究から過疎高齢者の生活実態とその生活を支える条件について考察している。

5章（山本努）の「過疎地域—過疎化の現段階と人口供給」では、人口構造の分析から現段階における過疎状況の特質として、①「少子・高齢者人口中心」社会の到来、②「集落分化」型過疎の進行を指摘し、広島県比婆郡西城町における定住経歴の調査結果から過疎農山村の特性として地域生活構造の土着的性格と流動的性格の併存を指摘している。6章（速水聖子）の「混住化と地域社会」は、農業を営む土着住民と非農家の新住民が混住する地域を取り上げ、福岡県糸島地域の2つの事例研究に基づき、生活構造が異なり多様化する混住化地域における社会的共同の意義について考察している。

第7章（徳野貞雄）の「農業の現代的意義」は、農業の危機的状況のなかで農業の現代的意味を農林業のもつ3つの機能、すなわち食糧生産機能、経済的機能、自然環境保全機能と関連づけて論述し、消費者の生活様式と食生活のあり方を問題として取り上げている。第8章（靄理恵子）の「地域開発と環境破壊」は、環境研究を公害問題に関連するものと公共事業に関連するものとに分けて整理し、ダム建設が住民生活や地域社会に与えた影響について述べている。

以上が各章の概要であり、いずれの章も現状と問題点を的確に論述しており、充実した内容となっている。なかでも高野や山本の論考は新しい知見が提示されて内容の濃いものとなっている。徳野の論考は独創的な用語を用いて読者を惹きつけ説得的である。速水の論考は混住化地域の社会学的研究視点を示し、土着住民と新住民の交流に着目して新しい共同性を見出している。ただ、これらの論考とは別に、1章の2つの表において不注意なミスがあるのは残念である。

全体を通して気になったのは、本書がどのような読者を想定して企画されたのかという点である。つまり本書は教科書として編集しようとしたものか、専門書として編集しようとしたものか定かでない。教科書的記述部分が多くなっている章もいくつかあるし、質の高い研究論文になっている章もみられる。各章に「学習のねらい」・「コラム」・「キーワード」が挿入されていたり、章によっては文献紹介が多いものがあったりすることから判断すれば、主に専門課程の学生を対象とした教科書として編集しようとしたものとしてみることができる。しかし、そうであったとしても各章の教科書的論述部分とオリジナルな研究の論述部分のバランスを統一する配慮が編集方針としてあってもよかったのではないだろうか。

最後に本書の書名となっている地方の概念について述べておく。地方の概念と

その範囲については山本が整理し、都道府県単位の最近の人口増加傾向に基づき東京都・神奈川県・愛知県以外の地域を地方とするなど幾つかの考え方を示している。ここでは山本とは若干異なる筆者の見解を述べておく。

地方という場合は対概念として何を指定するかが重要である。その1つが中央に対する地方であり、他の1つが全国から多くの人口を吸引してきた大都市に対する地方である。前者は具体的には中央政府に対する地方自治体であり、アソシエーション・レベルの概念である。それに対して後者の地方は空間的意味と社会的意味を含むコミュニティ・レベルの概念である。これらはどちらも広く使用されているが、社会学においては大量の人口を吸引する大都市圏と大量の人口を送出する地方という対比が重要である。そして大量人口を吸引した大都市圏は過密なアーバンな世界であり、大量人口を送出した地方はよりルーラルな世界である。こうしたコミュニティ・レベルの概念として地方概念を規定した場合、地方の対極となる大都市圏を具体的にどこまで入れるのかということが問題となる。東京を中心とする首都圏だけという考え方もあれば福岡都市圏や広島都市圏を含むという考え方もあろう。これは程度問題である。筆者は首都圏、京阪神圏、名古屋圏といった三大都市圏を地方の対極として指定し、三大都市圏以外の地域を地方と呼ぶこととしている。なぜなら、高度経済成長期に大量の人口が三大都市圏に流入し、こんにち三大都市圏は他の大都市圏と比べて突出して広大な連続的の市街地となっているからである。

『地域コミュニティ再生とエコミュージアム』  
深見聡著、青山社、2008年、200頁、2,300円

豊田 謙二（熊本学園大学）

つい最近のこと、地域での住民ネットワークについて研究する機会があった。このネットワークの構想は、認知症高齢者の徘徊を見守る目的のものである。徘徊を抑制するのではなく、普通の生活の延長としての徘徊を許容する点に、そして任意の住民主体によるネットワーク化にその意義がある。

さて、深見聡氏の『地域 コミュニティ再生とエコミュージアム』を拝読した。筆者のコミュニティの再生に向けた強い思いとともに、まちづくりに向けたエコミュージアム手法への確信に満ちた言辞に深く感銘した。リスク社会の今日、生活レベルでの社会的援助や住民の支援、そして筆者の説く「ネットワーク型の連携」が不可欠な地域社会になっている。

本書へのコメントを呈するまえに、筆者のまちづくりコンセプトについて、まずは本書に依拠しつつ概観したい。本書は本論9章建で、それに補論Ⅰ・Ⅱが加えられて構成されている。副題で、「協働社会のまちづくり論」と謳う。本書は理論的研究を含むものの、まちづくりへの実践を基底とした事例研究学として示唆に富む高著である。拝読して感銘するのは、まちづくりへの真摯な実践の積み重ねである。

かくして、評者としては、実践的な箇所を枚挙して筆者のまちづくりの展望と論旨とを具に論定すべきものの、評者の力量の不足故に、本書での特徴を構成する基礎範疇を取り上げることによって、その主題に迫ることとしたい。

まず「エコミュージアム」とは、筆者によれば、多自然居住地域の創造に向けた、その将来型の形態と手法としての「ネットワーク」である。と言う説明だけではわかりにくい。その要諦は以下の三つの理念である。①地域での歴史的な生活・産業・慣習等を映し出すこと、②当該での地域の自然と人間との営みが表現されていること。そして③地域の自然・文化遺産の発見と学習を通じてそれを守り、活用すること。

ではコミュニティ再生においてエコミュージアムはどのような意義を持つのであろうか。筆者はこう言う。「地域資源を人文環境と自然環境のなかから把握し発信していくという、地域をまるごと博物館に見立てるエコミュージアムは有効である」。地域、たとえば町や地区に散在している自然・文化・社会的諸資源を「エコミュージアム」という括りのなかに据えて、それぞれの諸資源をネットワーク上でつなぐ、というわけである。

とすると、対象とする地域のなかで「コミュニティ再生」をリードできる推進団体が必要となる。筆者は、「今日型地域性集団」という特性を有するNPO法人こそがその責務を負うべきとするが、とくに住民の地域資源への「気づき」を促しうる活動を重視する。具体的には、NPO法人が住民を集め、エコマップなどの

手法を駆使したワークショップによって、生涯学習を推進しうるからである。

これで、いわば役者がそろったことになる。目的としての「コミュニティ再生」、手法としての「エコミュージアム」、そして担い手としての「NPO 法人」である。本書には、「たにやまエコマップ」が注目を集め、観光や教育などの分野で活用されているという事例も例示されている。そうしたワークショップの成果にもかかわらず、筆者は、その実践で得た課題や問題性を率直に吐露している。評者によれば、それは以下のようにまとめられる。

①結果としては、官からの積極的な参画は得られなかったこと、②農山漁村とは区別される都市部特有の課題が整理されるべきこと、③本事業への動機づけの困難さなどである。

①は本書の副題、「協働社会のまちづくり論」にもかかわる最重要論点である。コミュニティ再生での NPO 法人の役割の重大性を筆者は十分認識しているが、住民と住民をつなぐ役割とともに、住民と地方自治体との「協働」をさらに実践と理論との両面で検証されることを期待したい。NPO 法人先進国欧州に比較して、わが国では余りにも法制度上でも活動力でも微力だからである。

②と③とは、コミュニティ再生の目標設定において重なるので、この点に関する評者としての私見を述べ、書評の責を塞ぐこととしたい。

さて、われわれは日常生活上の多様なリスクや大きな不安などを抱えているが、そうした課題は普通的生活圏域（＝地域）のなかでの解決、あるいは予防が望ましいのである。だが、住民が共通の課題として認識して、なんらかの活動へと踏み込みうるためには、現在の自己解決的な生活スタイルを協働解決型へと転回させる、強烈的な「何か」を必要としている。たとえば、認知症地域ケアで住民が活動するのは、個人的な関わりの限界が示され、協働がなければ認知症への強い不安を解消しえない、という提案に呼応しているからである。

『観光化する社会——観光社会学の理論と応用』

須藤廣著、ナカニシヤ出版、2008年、192p、2500円

加来 和典（下関市立大学）

日本政府は観光立国を国家戦略に位置づけるとして、2007年には観光立国推進基本法を施行、2008年には観光庁を設置した。これらは主に海外との交流に目を向けたものであるが、国内では、例えば、農林水産省が、農山漁村余暇法に基づき、グリーン・ツーリズムを推進してきた。グリーン・ツーリズムを観光と一緒にしてしまつては、本質を捉えていないと言われそうだが、いずれも、「非日常」の産業化、政策化という点で共通すると言える。このような動向を見るにつけ、観光はもはや残余の領域ではないと評者は感じる。サブタイトルに「理論と応用」と銘打つ本書は、近年の観光社会学の理論をレビューすることから始められている。

第1章「観光と再魔術化する世界」では、前近代の旅とポストモダンの旅の共通項として非日常性があるとし、それを、デュルケムの集合表象論、ボードリヤールの消費社会論、シュッツの意味論などを下敷きに分析する。なかでも興味深いのは、近代化を担う認知様式（バーガー）を観光へ適用した次の一節である。「観光者は近代性の原理の対極に『非日常的』観光行動の理想を見出すが、実際の行動には近代性の原理が『波及』するのである」。そして、このような『分裂』こそが、現代の観光（性愛も同様）の『現実』の姿であろう」と著者は見る。この著者の視点はさらにウェーバの脱魔術化の議論に重ねられていく。しかしながら、著者の視点は近代化に収束するのではない。著者の今一つの視点は、再魔術化である。著者は「<脱魔術化>がもたらす近代の『疎外感』は<再魔術化>を同時に呼び込んで来た」とし、観光は近代の再魔術化の重要なアクターであるとす。しかしながら、それが産業資本の内部で行われる限り、そこには感情労働のような労働疎外が引き起こされることも著者は見落とすことなく指摘する。観光をこのように相反する2つの方向性を持つものとしてとらえるところに著者の分析枠組みは構築されているのである。「産業化された観光が<非日常性>の日常化というループのなかにあるとすれば、観光の<非日常性><他者性>を守るためには、このループから抜け出すしかない」とし、二つの方向を著者は示す。一つは、産業社会の<外部>にあるものを、<内部>に引き込まず<外部>にあるままの状態を保つ方向（例 エコ・ツーリズム）。いま一つは、産業社会の<内部>にあるものを<外部>に出すという方向である（例 バックパッカー・ツー

リズム)。第1章の補論として、「戦前の別府と温泉観光地の近代」と題する小論が付されている。ここでは、「前近代の湯治客の旅とは質的に異なる速度と合理性を期待する新しい観光客向けに」バスガイド付き遊覧バスが導入されたことの意味が述べられる。

第2章「難民が観光資源となるとき 在タイミャンマー難民カヤン族の観光化」は、観光化の深刻な事例を取り上げる。ミャンマーからの難民がタイ国内で「人間動物園 human zoo」とも呼ばれる状況におかれていることが、著者自身の現地調査から報告される。彼らは移動や労働の自由もなく、また難民キャンプから出てしまっているがゆえに、国連の諸機関等からも保護を受けることができないという。これらの観光用「山岳民族村」がエコ・ツーリズムへと衣替えしていることも報告されるが、著者によれば、それは、世界的な「持続的観光」ブームの文脈に乗った形をとるものでしかない。著者は、観光の理念型として、他者を受け入れることによる自己変容が観光客・観光地住民の相互に生ずる場合を想定する。「このようなく非日常性」の互酬性が成立するのは、ホストとゲストの関係が人格的に開かれており、かつ原則的に対等であることが条件である」としているが、この章で紹介される事例はその対極にある非対称な事例である。この章を締めくくる著者の次の指摘は重要であろう。「こういった問題は、現代の日本観光のような高度にシステム化されたところでは、オペラートに包まれ、あるいは習慣化されたサービスのなかで『あたりまえ』のこととされ、前景化されることがない」。第2章補論「観光とジェンダー・エスニシティ」では、ハワイ観光のロマティシズムが人種やジェンダーの階層性（非対称性）を前提としていることが述べられる。

第3章「癒しの里のフレームワーク 由布院温泉住民の観光地解釈フレームをめぐって」では、ゴフマンらの議論を踏まえ、住民が持つ解釈図式（フレーム）から、人々の観光イデオロギーがいかなる社会的文脈からもたらされるのかを、インタビューの言説分析をもとに解明しようとする。分析の結果から、観光化に対して四つのフレームが存在することを著者は見いだす。著者によればフレームは固定的なものではなく、由布院の開発や住民運動の展開のなかで変化していると指摘している。第4章「まちの再魔術化と住民の意識 北九州門司港地区の住民意識調査から」も観光地住民を対象とする分析であるが、ここでは、質問紙調

査を中心に分析が進められる。その結果、「行政主導で表現しようとしてきた人工的『レトロ』が表す消費的イメージが、住民が生活のなかで愛着を持ってきた門司港のイメージと乖離していること」が分かったとする。その上で、著者は、非対称性を克服する住民側からの主体的で相互的な表現行為の創出が必要であると主張する。

第5章「バックパッカー・ツーリズムのパラドックス」で、著者は、バックパッキングの歴史的展開について分析するとともに、タイやベトナムなどで実施した調査紙調査を分析する。著者は自己の経験も交えながら、初期のバックパッカーは他者にふれることにより、自己変容を経験し、また訪問地の生活のなかに他者性を求めていたと述べる。現代のバックパッカーはこのような実存的古層を未だに持ちつつも、その上に消費社会の新しい層が被いかぶさっていると指摘する。ここでは「実存」という語がキーワードとなっている。

第6章「エピローグ ツーリズムの困難とモロカイ島の選択」では、これまでの議論を総括しながら三つの矛盾が指摘される。すなわち、〈観光のまなざし〉の矛盾、〈非日常性〉追求の矛盾、観光における〈アウラ〉追及の矛盾である。その上で、モロカイ島における文化観光づくりの例から、矛盾に陥らない可能性とその困難について報告している。

すでに紙幅も尽きたようである。もうすこし記述が丁寧であればよかったのにと感じた点を1、2挙げておきたい。第3章で展開されるフレーム分析は興味深いものであるが、フレーム析出の手続きがはっきりしない点が残念である。またフレームの非固定性を述べながらも、時間的なフレームの変化は一元的な説明に終わっている感じがあり、住民が相互に織りなすフレームのダイナミズムが伝わりにくく感じた。とは言え、本書は大変興味深い本である。著者の旅好きがあちこちに顔を出し、飽くことなく読み通すことができた。また、意味論的アプローチを中心とした社会学の応用力を知ることができたことも著者に感謝したい。